様式 C-7-2

自己評価報告書

平成　２３年　４月　８日現在

機関番号：１１５０１
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2008 ～ 2011
課題番号：２０７９１６８９
研究課題名（和文）　通所者の生活機能に関する精神科デイケア縦断研究
研究課題名（英文）　Rehabilitation effects of psychiatric daycare services: Base on International Classification of Functioning, Disability and Health (ICF) model
研究代表者　齋藤　深雪（SAITO　MIYUKI）
山形大学・医学部・准教授
研究者番号：３０３３３９８３

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学
キーワード：精神看護学，リハビリテーション，医療・福祉，精神科デイケア，ICF

１．研究計画の概要

（１）本研究の目的について

①精神科デイケア研究の課題

精神科デイケアは，精神保健福祉対策では通院医療に位置づけられるが，充実した生活支援も行っている。生活支援は，精神障害者の社会参加を促進するための重要な支援である。しかし，精神科デイケアの生活支援の効果を検討するための，精神障害者の生活機能に関する研究は行われていない。

生活機能の一部である生活技能に関する研究は，研究者によって着目する生活技能が異なり，また生活技能を測定する尺度が異なるため評価をする共通指標が用いられていない。そのため，精神科デイケアの効果を共通指標として示されておらず，精神科デイケアの効果を正確に提示できていない部分がある。

②本研究の目的

目的は，精神障害者の生活機能の実態，および精神障害者の生活機能に対する精神科デイケアの効果を明らかにすることである。

（２）本研究の内容

本研究では，精神科デイケア通所者の生活機能を評価指標にし，精神科デイケアについて縦断研究を行う。精神科デイケアの効果を明確に提示するため，作業訓練中心の支援を提供する精神障害者小規模作業所を比較施設とする。

①平成 20 年度の研究内容

平成 20 年度は，山形県の精神科デイケアおよび精神障害者小規模作業所の通所者を対象に予備的研究を行う。その上で，平成 21 年度以降に行う研究の結果を予測し，質問紙の不具合を調整する。

②平成 21-23 年度の研究内容

平成 21 年度-23 年度は，全国の精神科デイケアおよび精神障害者小規模作業所の通所者を対象に 3 年間の縦断研究を行い，精神障害者の生活機能の実態および精神障害者の生活機能に対する精神科デイケアの効果を明らかにする。

２．研究の進捗状況

（１）平成 20 年度の研究の進捗状況

山形県の精神科デイケアおよび精神障害者小規模作業所の通所者を対象に予備的研究を行った。その結果，今後の調査を遂行する上で結果を予測でき，有意義であった。質問紙の不具合を修正し，質問紙の完成度が高まった。

（２）平成 21-22 年度の研究の進捗状況

①平成 21 年度の進捗状況

精神科デイケア通所者うち，統合失調症と診断された者名 915 名，および精神障害者小規模作業所通所者のうち，統合失調症と診断された者 417 名を対象に，質問紙調査を行った。質問紙には，精神障害者生活機能評価尺度などを用いた。対象者のうち，質問項目に未回答のない者を分析対象とした。分析対象は，精神科デイケア通所者 220 名(24.0%)，精神障害者小規模作業所通所者 230 名(55.1%)であった。

その結果，精神科デイケア通所者精神障害者と精神障害者小規模作業所通所者の生活機能は個人差の大きいことを明らかにした。また，どのような通所目的をもっているか，同居家族の有無と続柄によって生活機能に差がみられた。

今回の結果は，平成 23 年度まで縦断研究

を実施するための比較する基準になるため，有意義であった。

②平成 22 年度の進捗状況

平成 22 年度は，平成 21 年度から 23 年度までの 3 年間の縦断研究のうちの 2 年目であった。対象と方法は，平成 22 年度と同様であった。

その結果，精神科デイケア通所者は昨年の生活機能点よりも高い傾向にあることを明らかにした。生活機能点の下位尺度である活動点が高くなっており，生活機能点の下位尺度である参加点には変化がなかった。一方で，精神障害者小規模作業所通所者ではこのような変化はみられなかった。

今回の結果は，精神科デイケア通所者の生活機能の変化と，精神科デイケア通所者と精神障害者小規模作業所通所者の生活機能の特徴を明らかにでき，有意義であった。

３．現在までの達成度

①当初の計画以上に進展している

理由）

平成 20 年度から 23 年度までの 4 年間の研究で，精神障害者の生活機能に対する精神科デイケアの効果を明らかにするという大きな研究目的がある。その大きな研究目的を達成するために，各年度にそれぞれの研究計画と研究目的がある。

各年度の研究計画通りに研究を遂行でき，各年度のそれぞれの目的を達成できている。また，当初の計画以上の結果が得られている。

４．今後の研究の推進方策

本研究は，当初の計画以上に進展しており，研究計画の変更あるいは研究を遂行する上での問題はない。そのため，今後も研究計画に従って研究を遂行する予定である。

５． 代表的な研究成果

（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計３件）

①Miyuki Saito, Kaoru Baba, Eiko Suzuki et al：Rehabilitation effects of psychiatric daycare services: Base on International Classification of Functioning, Disability and Health (ICF) model. The 6th International Conference on Social Work in Health and Mental Health, June 28 - July 2 , 2010, Reykjavíkurborg-Ireland.

②Miyuki Saito i, Baba Kaoru, Suzuki Eiko et al：Examination of reliability and validity of a self-rating scale for participatory aspects of daily living function in individuals with mental disorders. The 1st International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science, September 19-20, 2009, Kobe -Japan.

③Miyuki Saito, Suzuki Eiko, Maruyama Akiko：Effects of psychiatric daycare on users with chronic diseases. The 13th Research Conference of the Workgroup of European Nurse Researchers (WENR), September 2-5, 2008, Vienna-Austria.